

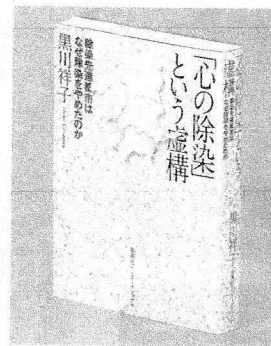
本書は、東京電力福島第一原発事故の影響によって「特定避難勧奨地点」の指定を受けた伊達市を舞台に、住民の苦悩や葛藤を克明に描いている。子ども、健康と未来を必死に守ろうと行動する親たち、その親を気遣い心配をかけまいとする子どもたち、孤軍奮闘する若手議員、そうした意に反して展開される政策……。『特定避難勧奨地点』の設定は、避難の可否にともなう格差や排除をもたらした。

当初は「除染先進都市」を掲げた市の方針転換が、混乱に拍車を掛けた。放射性物質による

有事の民主主義を問う

「心の除染」という虚構

黒川 祥子著



汚染や被ばくを心配する「『根拠のない』感情をこそ、除染すべき」と「心の除染」を打ち出

し、地域にさまざまな摩擦を生む。人々の関係性をいや応なしに分断していく。

事故発生から6年を経たいま、「もう原発事故のことは見聞きしたくない」という人もいるだろう。しかし、私たちは被災地で何が起きているかを知るべきだ。分かったつもりで批判するのはたやすいが、それは自

らが「加害者」、著者(国見町生まれ、伊達市出身)の言葉を借りれば「幼きものへの『加害者』」になり得ることを意味する。

被災住民のリアルな心情とともに、そこに作用する政治・行政、原子力推進機関などの存在も見逃せない。「ひとたび原発事故が起きれば、この国に民主主義があったのかと疑わざるを得ないように、人々は大きな力に翻弄される」。あと書きのこの言葉は、私も原発事故被災地域の住民から幾度となく聞かされた。彼らの指摘はこうだ。民意が十分に反映されずに展開され

る政策は、被災者を窮地に追い込むことすらある。これはこの国の根源的な構造に起因するもので、ことは原発事故に限らない。有事となれば、同様のことがいつでも再び起こり得る。だから、そうした現状をいまから変えていかなければいけない。そう、誰にとっても人ごとではないのだ。自分の身に置き換え、被災地へ想いをはせながら読んでほしい。

(佐藤彰彦・高崎経済大准教授)

(集英社インターナショナル
・1944円)